日蓮大聖人御書全集

太田左衛門尉御返事

おおたさえもんのじょうごへんじ

新版1371～1375

太田左衛門尉御返事

弘安元年('78)4月23日　57歳　大田乗明

当月十八日の御状、同じき二十三日の午剋ばかりに到来す。やがて拝見仕り候い畢わんぬ。御状のごとく、御布施、鳥目十貫文・太刀・五明一本・焼香二十両、給び候。

そもそも、専ら御状に云わく「某、今年は五十七に罷り成り候えば、大厄の年かと覚え候。なにやらんして正月の下旬の比より卯月のこの比に至り候まで、身心に

苦労多く出来候。本より、人身を受くる者は必ず身心に諸病相続して五体に苦労あるべしと申しながら、更に」云々。

このこと最第一の歎きのことなり。十二因縁と申す法門あり。意は、我らが身は諸苦をもって体となす。されば、先世に業を造る故に諸苦を受け、先世の集まれる煩悩が諸苦を招き集め候。過去の二因、現在の五果、現在の三因、未来の両果とて、三世次第して一切の苦果を感ずるなり。在世の二乗が、これらの諸苦を失わんとて、空理に沈み

灰身滅智して、菩薩の勤行精進の志を忘れ、空理を証得せんことを真極と思うなり。仏、方等の時、これらの心地を弾呵し給いしなり。しかるに、生をこの三界に受けたる者、苦を離るる者あらんや。羅漢の応供すら、なおかくのごとし。いわんや底下の凡夫をや。さてこそ、いそぎ生死を離るべしと勧め申し候え。これら体の法門はさて置きぬ。

御辺は「今年は大厄」と云々。昔、伏羲の御宇に、黄河と申す河より亀と申す魚、八卦と申す文を甲に負って浮かび

出でたり。時の人、この文を取り挙げて見れば、人の生年より老年の終わりまで厄の様を明かしたり。厄年の人の危うきことは、少なき水に住む魚を鴟・鵲なんどが伺い、灯の辺りに住める夏の虫の火の中に入らんとするがごとくあやうし。鬼神ややもすれば、この人の神を伺いなやまさんとす。神内と申す時は、諸の神、身に在って、万事心に叶う。神外と申す時は、諸の神、識の家を出でて万事を見聞するなり。当年は、御辺は神外と申して、諸の神他国へ遊行すれば、慎んで除災得楽を祈り給うべし。また

木性の人にてわたらせ給えば、今年は大厄なりとも、春夏のほどは何事かわたらせ給うべき。至門性経に云わく「木は金に遇って抑揚し、火は水を得て光滅し、土は木に値って時に痩せ、金は火に入って消え失せ、水は土に遇って行かず」等云々。指して引き申すべき経文にはあらざれども、予が法門は、四悉檀を心に懸けて申すならば、あながちに成仏の理に違わざれば、しばらく世間普通の義を用いるべきか。

しかるに、法華経と申す御経は、身心の諸病の良薬なり。

されば、経に云わく「この経は則ちこれ閻浮提の人の病の良薬なり。もし人病有らんに、この経を聞くことを得ば、病は即ち消滅して、不老不死ならん」等云々。また云わく「現世安穏にして、後に善処に生ず」等云々。また云わく「諸余の怨敵は、みな摧滅す」等云々。取り分け奉る御守りの方便品・寿量品、同じくは一部書いて進らせたく候えども、当時は去り難き隙ども入ること候えば、略して二品奉り候。相構えて相構えて、御身を離さず、重ねつつみて御所持あるべきものなり。

この方便品と申すは、迹門の肝心なり。この品には、仏十如実相の法門を説いて十界の衆生の成仏を明かし給えば、舎利弗等はこれを聞いて無明の惑を断じ、真因の位に叶うのみならず、未来華光如来と成って成仏の覚月を離垢世界の暁の空に詠ぜり。十界の衆生の成仏の始めはこれなり。当時の念仏者・真言師の人々、成仏は我が依経に限れりと深く執するは、これらの法門を習学せずして、「いまだ真実を顕さず」の経に説くところの名字ばかりなる授記を執する故なり。

貴辺は、日来はこれらの法門に迷い給いしかども、日蓮が法門を聞いて、賢者なれば本執をたちまちに翻し給いて、法華経を持ち給うのみならず、結句は身命よりもこの経を大事と思しめすこと、不思議が中の不思議なり。これはひとえに今のことにあらず。過去の宿縁開発せるにこそ、かくは思しめすらめ。有り難し、有り難し。

次に寿量品と申すは、本門の肝心なり。またこの品は、一部の肝心、一代聖教の肝心のみならず、三世の諸仏の説法の儀式の大要なり。教主釈尊、寿量品の一念三千の

法門を証得し給うことは、三世の諸仏と内証等しきが故なり。ただし、この法門は、釈尊一仏の己証のみにあらず、諸仏もまたしかなり。我ら衆生の無始已来六道生死の浪に沈没せしが、今、教主釈尊の所説の法華経に値い奉ることは、乃往過去にこの寿量品の久遠実成の一念三千を聴聞せし故なり。有り難き法門なり。

華厳・真言の元祖、法蔵・澄観、善無畏・金剛智・不空等が、釈尊一代聖教の肝心なる寿量品の一念三千の法門を盗み取って、本より自らの依経に説かざる華厳経・

大日経に一念三千有りと云って取り入るる程の盗人にばかされて、末学深くこの見を執す。はかなし、はかなし。結句は、真言の人師云わく「争って醍醐を盗んで各自宗に名づく」云々。また云わく「法華経の二乗作仏・久遠実成は無明の辺域、大日経に説くところの法門は明の分位なり」等云々。華厳の人師云わく「法華経に説くところの一念三千の法門は枝葉、華厳経の法門は根本の一念三千なり」云々。これ、跡形も無き僻見なり。真言・華厳経に一念三千を説きたらばこそ、一念三千という名目をばつかわめ。お

かし、おかし。亀毛・兎角の法門なり。

正しく久遠実成の一念三千の法門は、前四味ならびに法華経の迹門十四品まで秘せさせ給いてありしが、本門・正宗に至って、寿量品に説き顕し給えり。この一念三千の宝珠をば、妙法五字の金剛不壊の袋に入れて、末代貧窮の我ら衆生のために残し置かせ給いしなり。正法・像法に出でさせ給いし論師・人師の中に、この大事を知らず。ただ竜樹・天親こそ心の底に知らせ給いしかども、色にも出ださせ給わず。天台大師は玄・文・止観に秘せんと思しめ

ししかども、末代のためにや、止観十章・第七正観の章に至ってほぼ書かせ給いたりしかども、薄葉に釈を設けてさて止み給いぬ。ただ理観の一分を示して、事の三千をば斟酌し給う。彼の天台大師は迹化の衆なり。この日蓮は本化の一分なれば、盛んに本門の事の分を弘むべし。

しかるに、かくのごとき大事の義理の籠もらせ給う御経を書いて進らせ候えば、いよいよ信を取らせ給うべし。勧発品に云わく「当に起って遠く迎うべきこと、当に仏を敬うがごとくすべし」等云々。安楽行品に云わく「諸天は

昼夜に、常に法のための故に、しかもこれを衛護す乃至天の諸の童子は、もって給使をなさん」等云々。譬喩品に云わく「その中の衆生は、ことごとくこれ吾が子なり」等云々。法華経の持者は教主釈尊の御子なれば、いかでか梵天・帝釈・日月・衆星も昼夜朝暮に守らせ給わざるべきや。厄の年、災難を払わん秘法には、法華経に過ぎず。たのもしきかな、たのもしきかな。

さては、鎌倉に候いし時は細々申し承り候いしかども、今は遠国に居住候によって、面謁を期すること、さ

らになし。されば、心中に含みたることも、使者・玉章にあらざれば、申すに及ばず。歎かし、歎かし。

当年の大厄をば、日蓮に任せ給え。釈迦・多宝・十方分身の諸仏の法華経の御約束の実・不実は、これにて量るべきなり。またまた申すべく候。

弘安元年 戊 寅 四月二十三日　　日蓮　花押

太田左衛門尉殿御返事